

■ サルスベリ . . .

サルズベリとは、実に花の趣きと乖離（かいり）したネーミングです。でも、そのおかげで一度耳にすると絶対に忘れません。由来は、樹皮がはげ落ちたあとの幹がツルツルとしていて木登り上手な猿も滑ってしまいそうだと理由からです。

他に、猿滑（さるなめり）、猿日紅（さるじつこう）、笑木（わらいのき）、擽木（くすぐりのき）、紫薇花などの別名もあります。

笑木、擽木については、貝原百軒もその著書『花譜』で「幹を指で搔（か）けば枝葉が動き、怕痒樹（はくようじゅ：かゆさをこわがる木）と言う」と紹介しています。実際にはそのようなことはあり得ないでしょうが、この幹肌を手を添えながら語らう親子の風景が思い浮かびます。

話が脱線して恐縮ですが、私の父はこの木を「なまけものの木」と呼んでいました。秋はどの植物に先駆けて落葉し、春はどの植物よりも芽吹きが遅いからです。今風に言えば「スローライフ樹」といったところでしょうか。

そして、漢字表記として最も親しまれているのが「百日紅」（ヒャクジツコウ）です。これは花期が長く、「百日くらい紅の花を付ける」ということからなのですが、加賀千代女の句に「散れば咲き 散れば咲きして 百日紅」ともあるように、実際は一度咲いた枝先から再び芽が出て花を付けるためずっと咲き続けているように見えているだけです。花は、紅色と白色を中心に、ピンクやフジ色などさまざまな中間色があります。花言葉は「雄弁」。華やかなその風情からきたものでしょう。



当団地では、管理事務所周辺に数本あります。梅雨明けとともに開花し、夏休み中、私たちを楽しませてくれることでしょう。5号棟西にも1本ありますが、こちらは実生で育ったネズミモチに隠れて惨めな状態です。

最後に、『花の文化史』（松田修著）に紹介されている朝鮮の伝説を引用します。

昔、朝鮮の海岸の漁村で毎年水難を防ぐために村の娘を竜神に捧げる風習があった。ある年この村第一の長者の娘がその選に入った。長者であるからといって村のおきてにそむくわけにもいかず、娘は犠牲者として最後の化粧を終え、海岸に立って竜神の来るのを待っていた。その時、この国の王子が黄金の船を操ってこの岸に来合わせ、この娘から事情をきき、娘のために竜神と戦ってこれを征伐した。それが縁で王子とこの娘は恋仲になったが、王子は王の命令で他に行くべき使命があったので、百日を期して再びここに現れることを約して別れることになった。娘にとって百日は千秋の思いであったが、ついに百日を待たずに悶死した。約を果して百日目に現れた王子は愛人の死をなげき悲しみ、その娘の遺体をねんごろにとむらい埋めてやったところ、そこにいつか1本の木が生え、花が咲いた。これが百日紅で、この木が百日もの長い間花が咲いているのもそのためだという。

前半はアンドロメダ神話、後半は韓流ドラマ仕立てで愉快です。

蛇足ながら、以前、NHK番組「お江戸でござる」で解説者をなさっていたのでご存知の方も多いでしょうが、杉浦日向子の作品「百日紅」は絶対のお奨めです。練馬図書館にもあります。



